

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用物理 I	平成 2 0 年度	大矢弘男・田村陽次郎	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

高校教科書を使い、1, 2 年生で学んだ基礎の上に波の性質と光の粒子性, 原子モデルについて学ぶ。また、実験では物理学のいくつかのテーマを取り上げ、体験を通して自然界の法則を学ぶ。

[授業の内容] 前, 後期とも, 第 1 週～第 1 5 週の内容はすべて J A B E E「複合型生産システム工学」教育プログラム 学習・教育目標 (B) <基礎> (c) および電気工学科学習・教育目標 (B) <基礎> (c) として JABEE 基準 1 (1) (c) に相当する。

前期 (大矢)

第 1 週 実験ガイダンス (1)

第 2 週 実験ガイダンス (2)

第 3 週から第 9 週までは下記の 7 テーマの実験をグループ別に行う。

1. 分光計: 精密な角度測定器の分光計を用いて, ガラスの屈折率を求める。

2. レーザー光による光の干渉: 光の重要な性質である干渉・回折現象をレーザー光により観察する。

3. 気柱による音速測定: 音の定常波を作り基本音と倍音を理解する。

4. 直線電流のまわりの磁界: 直流電流のまわりに出来る磁界の大きさを測定し, 地磁気の水平分力を計算する。

5. 磁力計による地磁気の水平分力の測定: 偏角磁力計, 振動磁力計を用いて, 地磁気の測定をする。

6. 電子の比電荷 ( $e/m$ ) の測定: 電子の基本的定数をデモ用の装置を用いて測定する。

7. プランク定数の測定: 量子力学の基本定数をデモ用の装置を用いて測定する。

(大矢) 以下は, 教科書「物理 II」を使用する。

第 1 0 週 光の粒子性

第 1 1 週 光の粒子性

第 1 2 週 粒子の波動性

第 1 3 週 原子モデル

第 1 4 週 原子モデル

第 1 5 週 原子核の構成

第 1 6 週 原子核と核エネルギー

ただし, 第 8 週は実験のため中間試験は行わない。

後期

(田村) (以下, 教科書「物理 I」を使用する。)

第 1 週 光の進み方

第 2 週 光の反射, 屈折

第 3 週 光の性質

第 4 週 レンズ

第 5 週 ヤングの実験

第 6 週 光の回折

第 7 週 光の干渉

第 8 週 中間テスト

以下, 教科書「物理 II」を使用する。

第 9 週 物質の 3 態

第 1 0 週 熱膨張

第 1 1 週 気体の状態方程式

第 1 2 週 気体分子の熱運動

第 1 3 週 分子の熱運動と絶対温度

第 1 4 週 熱力学第 1 法則

第 1 5 週 状態変化と熱, 仕事

第 1 6 週 気体のモル比熱

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用物理 I (つづき)	平成 20 年度	大矢弘男・田村陽次郎	3	通年	履修単位 2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>実験</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実験を通して、基本的な機器の使い方が理解でき自分の力で実験を進める能力ができる。かつ実験内容の把握とその結果について分析し、レポートにまとめることができる。</li> <li>2. 分光計が理解できる。</li> <li>3. 音の定常波、基本音、倍音が理解できる。</li> <li>4. 電流により磁界が出来ることが理解できる。</li> <li>5. 磁気力が理解できる。</li> <li>6. 電子の磁界中の運動が理解できる。</li> <li>7. プランク定数が理解できる。</li> </ol> <p>講義</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8. 光の粒子性が理解できる。</li> <li>9. 量子力学の基礎が理解できる。</li> <li>10. 量子力学を用い原子の構造の基礎が理解できる</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 1. 波(音, 光)の表し方が理解できる。</li> <li>1 2. 波の反射, 屈折の説明ができる。</li> <li>1 3. 波の重ね合わせの原理が理解できる。</li> <li>1 4. 定常波の説明ができる。</li> <li>1 5. 固定端, 自由端反射が理解できる。</li> <li>1 6. 波の干渉, 回折が理解できる。</li> <li>1 7. ホイヘンスの原理が理解できる。</li> <li>1 8. ドップラー効果の説明ができる。</li> <li>1 9. レンズの像の簡単な作図ができる</li> <li>2 0. 物質の 3 態が理解できる。</li> <li>2 1. 気体の状態方程式が理解できる。</li> <li>2 2. 分子の熱運動と絶対温度が説明できる。</li> <li>2 3. 熱力学第 1 法則が理解できる。</li> <li>2 4. 状態変化と熱, 仕事 that 理解できる。</li> <li>2 5. 気体のモル比熱が理解できる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標] 1, 2 年生で学んだ基礎の上に波の性質と光の粒子性, 原子モデルの基礎について理解し, 問題を解くことが出来る。また, 実験では物理学のいくつかのテーマを取り上げ, 与えられた課題に関しては実験を遂行した上で適切にレポートをまとめることができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」各 8~25 を網羅した問題を 2 回の中間試験, 1 回の定期試験で出題し, 目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とする。実験毎にレポートの提出を求める。各試験とレポートの評価結果が百点法で 60 点以上の場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項]</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本校で課している数学, 物理の 1, 2 年生程度の基礎知識, 及びレポート製作に必要な一般的国語の能力があればよい。</p>	
<p>[レポート等] 物理学は短期間で理解することは極めて難しい。日頃から自分で問題を解くなどの予習復習が重要である。表面的なものにとらわれず, 根底にある普遍性を学ぶことも大切である。実験のレポートの他に必要に応じて出題し, レポートの提出を求めることがある。</p>	
<p>教科書: 「高等学校物理 I および II」 (啓林館) [物理・応用物理実験] (物理教室), 問題集: 「センサー物理 I + II」 (啓林館) 参考書:</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 講義に関しては, 前期末・後期中間・学年末の 3 回の試験の平均点で評価する。ただし, 60 点を取得できない場合は, それを補うための再試験を学年末を除く 2 回の試験について行う。その場合の評価は, 60 点を上限として評価する。実験は, 7 つのテーマの合計が 100 点となるように評価する。講義の評価の平均点の 75% と実験の評価の 25% を加えた点を最終的な評価とする。</p> <p>[単位修得要件] 学業成績で 60 点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気磁気学	平成20年度	鈴木昭二	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

電気磁気学は電氣的、磁氣的な現象を理解するための理論で、電気工学、電子工学、通信理論等を学ぶ学生にとって最も重要な基礎科目の一つである。本科目は第3学年と第4学年の2年間にわたっているが、本授業ではその前半としてベクトル演算、静電界における電界、電位、静電容量、誘電体等の概念およびそれらとエネルギーの関係を中心に学ぶとともに静磁界の方程式についても学ぶ。また、具体的な演習を通じて、電気磁氣的現象を理論的に考察し、解析する能力を身につけることをねらいとする。

[授業の内容]

すべての内容は、学習・教育目標(B)〈専門〉および JABEE 基準 1(1)(d)(2)a)に対応する。

前期

◆ベクトル演算

- 第1週 ベクトル記号、ベクトル関数、力線
- 第2週 ベクトルの積分定理
- 第3週 ベクトル関数の一意的決定
- 第4週 不連続面における発散と回転
- 第5週 立体角、演習

◆静電界の方程式

- 第6週 クーロンの法則
- 第7週 電界の方程式
- 第8週 前期中間試験
- 第9週 ポアソンの方程式（電位に対する方程式）
- 第10週 ポアソンの方程式の一般解
- 第11週 双極子、演習

◆物質と電界

- 第12週 導体と電界
- 第13週 誘電体を含む系の静電界
- 第14週 導体系、電位係数
- 第15週 コンデンサと静電容量
- 第16週 総合復習および演習

後期

◆電界系の方程式と電界のエネルギー

- 第1週 導体と電流
- 第2週 導体とオームの法則
- 第3週 接地抵抗、ジュール損失
- 第4週 時間変化を伴う電界系の方程式（基礎方程式）
- 第5週 時間変化を伴う電界系の方程式（電荷の緩和）
- 第6週 電界のエネルギー I
- 第7週 電界のエネルギー II
- 第8週 後期中間試験

◆静磁界の方程式

- 第9週 電流による磁界
- 第10週 磁束密度
- 第11週 ビオ・サバールの法則
- 第12週 磁束密度Bに関する基本式
- 第13週 ベクトルポテンシャルA
- 第14週 磁位（磁界のスカラーポテンシャル）
- 第15週 Bの体系のまとめ
- 第16週 総合復習および演習

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気磁気学 (つづき)	平成20年度	鈴木昭二	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>◆ベクトル演算</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ベクトル記号, ベクトル関数, 力線の概念が理解できる.</li> <li>ベクトルの積分定理が理解できる.</li> <li>ベクトル関数の一意的決定の意味が理解できる.</li> <li>不連続面における発散と回転が理解できる.</li> <li>立体角が理解できる.</li> </ol> <p>◆静電界の方程式</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>クーロンの法則が理解できる.</li> <li>電界の方程式が理解できる.</li> <li>ポアソンの方程式 (電位に対する方程式) が理解できる.</li> <li>ポアソンの方程式の一般解が理解できる.</li> <li>双極子が理解できる.</li> </ol> <p>◆物質と電界</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導体と電界の関係が理解できる.</li> <li>2. 誘電体を含む系の静電界について理解できる.</li> <li>3. 導体系, 電位係数の概念が理解できる.</li> <li>4. コンデンサと静電容量について理解できる.</li> </ol>	<p>◆電界系の方程式と電界のエネルギー</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>15. 導体と電流について理解できる.</li> <li>16. 導体とオームの法則が理解できる.</li> <li>17. 接地抵抗, ジュール損失について理解できる.</li> <li>18. 時間変化を伴う電界系の基礎方程式が理解できる.</li> <li>19. 時間変化を伴う電界系の方程式 (電荷の緩和) が理解できる.</li> <li>20. 電界のエネルギーについて理解できる.</li> </ol> <p>◆静磁界の方程式</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>21. 電流による磁界について理解できる.</li> <li>22. 磁束密度について理解できる.</li> <li>23. ビオ・サバルの法則が理解できる.</li> <li>24. 磁束密度Bに関する基本式が理解できる.</li> <li>25. ベクトルポテンシャルAについて理解できる.</li> <li>26. 磁位 (磁界のスカラーポテンシャル) について理解できる.</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>ベクトル演算, 静電界における電界, 電位, 静電容量, 誘電体等の概念およびそれらとエネルギーの関係を中心に学ぶとともに具体的な演習を通じて, 電気磁気的現象を理論的に考察でき, 解析することができる.</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>電気磁気学に関する「知識・能力」1～26の確認を中間試験, 期末試験, レポートにより評価する. 1～26に関する重みは同じである. 4回の試験の平均を80%, レポートを20%として評価する. 合計点の60%で目標の達成を確認できるレベルの試験等を課す.</p>
<p>[注意事項] 授業中に理解できるように心掛けるとともに, 知識確認のために常に多くの問題を解いていく姿勢が大切である.</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>回路理論, システム理論, 三角関数, 微積分, 複素関数, フーリエ級数の基礎知識を有していること.</p>	
<p>[レポート等] 学習内容の復習と応用力の育成のため, 適宜課題レポートを提出してもらおう. レポートは内容だけでなく, 文章表現力も評価の対象とする.</p>	
<p>教科書: 「基礎電磁気学」桂井 誠著 (オーム社), 「電磁気学演習」後藤, 山崎共著 (共立出版)</p> <p>参考書: 「電気磁気学」安達, 大貫共著 (森北出版), その他多数の参考書, 演習問題集が図書館にある.</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 前後期中間, 前後期末の4回の試験の平均点を80%, 課題レポートの結果を20%として, その合計点で評価する. ただし, 学年末を除く各試験で60点に達していない者には再試験を課し, 再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には, 60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする.</p> <p>[単位修得要件] 前後期中間, 前後期末の4回の試験の平均点および課題レポートの結果をそれぞれ80%および20%とし, その合計点が60点以上であること.</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気回路	平成20年度	奥田 一雄	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

電気回路は受動素子 (R, L, C) により構成されている回路を解析, 評価あるいは設計するための理論で, 電気工学, 電子工学, 通信工学等を学ぶ学生にとって最も重要な基礎科目の一つである. 授業では2年生で学んだ直流回路, 交流回路の基礎事項を再確認していくとともに, 具体的な演習を通じて, 種々の回路解析に自由に対応できるような知識と理解力を深めていく.

[授業の内容]

すべての内容は, 学習・教育目標(B)〈専門〉および JABEE 基準 1(1)(d)(2)a)に対応する.

前期

◆複素数による表示法

第1週 複素数の表示法と四則演算

第2週 指数関数とオイラーの公式

第3週 正弦波と複素数の対応

◆交流回路

第4週 複素インピーダンス

第5週 交流回路の例

第6週 インピーダンスとアドミタンス

第7週 演習 (第1週から第6週までのまとめ)

第8週 前期中間試験

◆交流電力

第9週 中間試験の結果に基づく復習と演習

第10週 素子の電力とエネルギー

第11週 有効電力と無効電力

第12週 複素電力

◆相互インダクタンスと変成器

第13週 基礎式と結合係数

第14週 交流回路での変成器と等価回路

第15週 理想変成器

第16週 まとめおよび問題演習

後期

◆回路の諸定理

第1週 前期期末試験の結果に基づく復習と演習

第2週 重ねの理, 可逆定理, 補償定理

第3週 テブナンの定理とノートンの定理

第4週 定抵抗回路と逆回路

第5週 最大電力伝達原理と  $\Delta$ -Y変換

第6週 円線図

第7週 演習 (第1週から第6週までのまとめ)

第8週 後期中間試験

◆回路の諸定理

第9週 中間試験の結果に基づく復習と演習

第10週 三相交流の基礎と表示法

第11週 Y結線と $\Delta$ 結線

第12週 平衡三相回路 (その1) : Y-Y結線,  $\Delta$ - $\Delta$ 結線

第13週 平衡三相回路 (その2) : Y- $\Delta$ 結線,  $\Delta$ -Y結線

第14週 平衡三相回路における電力

第15週 回転磁界と演習 (第10週から第15週までのまとめ)

第16週 まとめおよび問題演習

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気回路（つづき）	平成20年度	奥田 一雄	3	通年	履修単位 2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>◆複素数による表示法</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>純虚数，複素数および複素共役の定義を記憶している。</li> <li>複素数の四則演算ができる。</li> <li>オイラーの公式を記憶して，複素数の極座標表示ができる。</li> <li>複素数を複素平面上のベクトルとして表すことができ，複素数の四則演算を幾何学的に表すことができる。</li> <li>正弦波交流を複素数で表すことができる。</li> <li>正弦波交流の時間微分・積分をベクトル演算子で表すことができる。</li> </ol> <p>◆交流回路</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>インピーダンスを直列，並列，直並列接続した回路の電圧，電流，合成インピーダンス等を正しく計算できる。</li> <li>交流ブリッジの平衡条件を計算することができる。</li> <li>インピーダンスベクトル，アドミタンスベクトルの意味を説明でき，基本素子回路に応用できる。</li> <li>直列共振回路および並列共振回路の共振周波数，共振回路のよさ等を正しく計算できる。</li> </ol> <p>◆交流電力</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>回路の力率，有効電力，無効電力を計算することができる。</li> <li>複素電力から有効電力，無効電力，皮相電力を計算できる。</li> </ol> <p>◆相互インダクタンスと変成器</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>相互誘導現象を理解し，相互誘導係数について説明できる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>相互インダクタンスMを含む回路の電圧・電流が満たすべき方程式を立てることができる。</li> <li>Mで結合された非導回路とT型誘導回路の対応関係を説明することができる。</li> </ol> <p>◆回路の諸定理</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>重ね合わせの理を用いて，複数の起電力を含む回路を解くことができる。</li> <li>可逆定理と補償定理の原理について説明できる。</li> <li>テブナンの定理とノートンの定理を理解し，回路網の電流計算を行うことができる。</li> <li>最大電力伝達定理について説明できる。</li> <li>Δ形接続をY形接続に，Y形接続をΔ形接続に変換できる。</li> <li>インピーダンスやアドミタンスの軌跡を描くことができる。</li> </ol> <p>◆多層交流</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>多相交流の発生原理を理解し，対称三層交流の瞬時式，ベクトル表記式を書くことができる。</li> <li>三相起電力および三相負荷の結合方式であるY結線とΔ結線を理解し，線間電圧と相電圧，線電流と相電流の対応関係を説明できる。</li> <li>対称三相回路において，Y-Y結線，Δ-Δ結線，Y-Δ結線，Δ-Y結線の電流分布を計算できる。</li> <li>対象三相回路の消費電力を計算できる。</li> <li>対称三層交流による回転磁界の発生原理を説明できる。</li> </ol>
--	--

<p>[この授業の達成目標]</p> <p>交流回路の理論を学ぶために必要な複素数計算や回路の諸法則を理解し，種々の交流回路におけるインピーダンス，アドミタンス，電流，電圧，電力，力率等を計算することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～26の習得の度合を中間試験，期末試験，レポートにより評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とし，試験問題とレポート課題のレベルは100点法により60点以上の得点で目標の達成を確認する。</p>
---	--

[注意事項] 授業中に理解できるように心掛けるとともに，知識確認のために常に多くの問題を解いていく姿勢が大切である。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 三角関数，指数関数，対数関数，複素数，微分，積分などの基礎数学の内容を理解していること。また，電気工学序論や電気回路で学んだ電気・電子工学に関する基礎的知識も必要となる。

[レポート等] 学習内容の復習と応用力の育成のため，随時，演習課題を与える。

教科書：「電気回路テキスト」瀬谷浩一郎編（日本理工出版会），「基礎からの交流理論」電気学会（オーム社）小郷 寛 原著  
 参考書：「詳解 電気回路演習上下」大下眞二郎著（共立出版） その他多数の参考書，演習問題集が図書館にある。

[学業成績の評価方法および評価基準] 前期中間，前期末，後期中間および学年末の4回の試験の平均点を80%，課題レポートの結果を20%として，その合計点で評価する。ただし，学年末を除く各試験で60点に達していない者には再試験を課すことがある。このとき，再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には，60点を上限として，それぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気電子計測	平成20年度	伊藤 保之	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

電気電子計測は電気・磁気・電子の基本計測技術と測定法に関する学問であり、電気電子工学の電気・電子および磁気的な計測と測定法の基礎事項について学習し、電気電子工学における基本的な測定技術と計測制御技術の概念および測定法の基礎を理解することを目標とする。

[授業の内容] すべての内容は、学習・教育目標(B)〈専門〉および JABEE 基準 1(1)(d)(2)a) に対応する。

前期

◆計測一般

- 第1週 電気計測の特徴、電気計測法の分類、単位と標準器
- 第2週 測定の誤差と測定値の取扱い、精密さと正確さおよび計器の感度

◆電気計測

- 第3週 指示電気計器の構成、駆動装置、制御装置、制動装置、目盛と指針、軸受装置
- 第4週 指示電気計器の目盛と指針、軸受装置、零位調整装置と外箱
- 第5週 指示電気計器の動作原理と正確さによる分類、指示電気計器の特性と動特性

◆指示電気計器

- 第6週 可動コイル形計器
- 第7週 可動鉄片形計器
- 第8週 前期中間試験
- 第9週 誘導形計器、整流形計器
- 第10週 電流計形計器と電流計形電力計
- 第11週 熱電形計器、電子電圧計
- 第12週 静電形計器、各種比率

◆検流計とオシログラフ

- 第13週 可動コイル形検流計、指針検流計、衝撃検流
- 第14週 電磁オシログラフ、ブラウン管オシロスコープ

◆積算計器と記録計器

- 第15週 交流用積算計器、電力量計の試験、他の積算計器
- 第16週 記録計器と、計器用変流器、計器用変圧器

後期

◆電磁気測定

- 第1週 電気計測器具、検出器、抵抗器、誘導器、コンデンサ
- 第2週 電流の測定、電圧の測定
- 第3週 直流電位差計、交流電位差計
- 第4週 直流電力の測定、交流電力の測定
- 第5週 無効電力の測定、力率と位相の測定
- 第6週 中抵抗の測定、高抵抗の測定
- 第7週 特殊抵抗の測定、接地抵抗・絶縁抵抗の測定
- 第8週 後期中間試験
- 第9週 インダクタンスの測定、静電容量の測定、インピーダンスの測定

◆磁気測定

- 第10週 磁束の測定、鉄損の測定

◆電気応用計測

- 第11週 遠隔測定、直送法、平衡式・符号式遠隔測定法

◆工業計測

- 第12週 工業量・電気量の変換、長さや力および圧力の電気計測、速度と流量の電気計測
- 第13週 温度と湿度の電気計測、化学量の電気計測と放射線計測

◆電子計測

- 第14週 半導体と電子回路の計測
- 第15週 電子計測回路
- 第16週 高周波の計測

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気電子計測 (つづき)	平成20年度	伊藤 保之	3	通年	履修単位 2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>◆計測一般</p> <p>1. 電気計測の特徴・直接測定と間接測定について説明できる。</p> <p>2. 基本単位とSI単位・標準電池と標準電圧発生器・標準抵抗器について説明できる。</p> <p>3. 測定の誤差と精度および感度について説明できる。誤差を含んだ測定値の取扱いと誤差の計算ができる。</p> <p>◆電気計測</p> <p>4. 指示電気計器の構成について説明できる。</p> <p>5. 指示電気計器の駆動・制御・制動装置が説明できる。</p> <p>6. 指示電気計器の目盛と指針・軸受装置について説明できる。</p> <p>7. 指示電気計器を動作原理と正確さにより使い分けができる。</p> <p>◆指示電気計器</p> <p>8. 可動コイル形計器, 可動鉄片形計器, 電流力計形計器の原理と構造および取扱い方について説明できる。</p> <p>9. 誘導形計器, 整流形計器, 熱電形計器, 静電形計器, 電子電圧計の構造と取扱い方について説明できる。</p> <p>10. 可動コイル検流計と指針検流計について説明できる。</p> <p>11. 電磁オシログラフとオシロスコープについて説明できる。</p>	<p>12. 交流積算計器と電力量計の誤差試験法が説明できる。</p> <p>13. 記録計器と計器用変流器・計器用変圧器が説明できる。</p> <p>◆電磁気測定</p> <p>14. 電気の検出器・抵抗器・誘導器およびコンデンサの概要と測定法に関係する取扱い方が説明できる。</p> <p>15. 特殊電流と高電圧の測定方法について説明できる。</p> <p>16. 直流と交流の電位差計について説明できる。</p> <p>17. 直流と交流電力および力率と位相の測定法が説明できる。</p> <p>18. 中抵抗と高抵抗および特殊抵抗の測定法が説明できる。</p> <p>19. インダクタンスと静電容量およびインピーダンスの測定法が説明できる。</p> <p>◆磁気測定</p> <p>20. 磁束の測定と鉄損の測定方法について説明できる。</p> <p>◆工業計測</p> <p>21. 工業量を電氣量に変換する方法と測定法が説明できる。</p> <p>◆電子計測</p> <p>22. 半導体素子の特性測定と電子計測回路について説明できる。</p> <p>23. 高周波の測定法について説明できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電気計測の特徴と測定法・基本単位・電気標準器および測定の誤差と精度について理解し, 指示電気計器の基本構成を学び, 指示電気計器の動作原理に基づき, 各種計器の構造・特徴・取扱い方について理解し, 電気電子計測器具の取扱い, および各種電気電子計測の測定ができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～23を網羅した問題を2回の中間試験, 2回の定期試験および小テストで出題し, 目標の達成度を評価する。達成度の評価における各「知識・能力」の重みは概ね同じである。評価結果が百点法で60点以上の場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 電気電子工学における重要な基礎科目であるため, 積極的な取り組みが必要である。疑問が生じたら直ちに質問し, 理解するように心掛けること。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 電気・電子工学序論, 電気回路, 電気磁気学および物理学の基本的事項は理解している必要がある。</p>	
<p>[レポート等] 必要に応じ各項目においてレポートの課題を与え提出させることがある。</p>	
<p>教科書: 「電磁気計測」 (改訂版) 西野 治 (電気学会) および配布プリント          参考書: 「電気計測」 ●電気工学入門演習● 金子 喜代治・堤 捨男 共著 (学献社)</p>	
<p>「学業成績の評価方法および評価基準」 前期中間・前期末・後期中間・学年末試験の4回の平均点で評価する。ただし, 学年末試験を除く3回の試験のそれぞれについて60点に達していない者には再試験を課し, 再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には, 60点を上限としてそれぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	



授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子回路	平成20年度	近藤 一之	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

電子回路では、入出力端子間の電圧電流だけに注目し、回路の働きを等価的に捉えるという考えが大切である。この授業ではまず、電子回路を学ぶ上で必要となる電気回路の知識を復習し、その知識の運用に習熟する。さらに、能動素子を形成する半導体の概要、ダイオード・トランジスタ・FETの動作について理解する。また、この等価回路の考えを中心に、トランジスタ増幅器、電力増幅、負帰還回路の解析法を習得する。

[授業の内容] すべての内容は、学習・教育目標(B)＜専門＞および JABEE 基準 1(1) (d) (2) a) に対応する

前期

◆電子回路の学び方と基礎知識の復習

第1週 電子回路はどのようなことを学ぶ科目であり、どのように社会に役立っているか、電子回路を理解するための基礎知識の確認（電圧源、電流源）

第2週 基礎知識の確認（アースの働き、テブナンの定理、ノートンの定理、それらの演習問題）

第3週 基礎知識の確認（複素数の計算、インピーダンスとアドミタンス、それらの演習問題）

◆電子回路素子

第4週 半導体と原子、自由電子と空孔の働き、半導体の種類

第5週 キャリヤのふるまい、pn接合、整流作用

第6週 ダイオード、

第7週 トランジスタ

第8週 前期中間試験

第9週 ダイオードとトランジスタの実験

第10週 接合形FET、MOSFET

第11週 その他の半導体素子、集積回路

◆増幅回路

第12週 増幅の基礎、トランジスタによる増幅の原理

第13週 トランジスタの基本増幅回路

第14週 増幅度と利得（dBの計算）、hパラメータの定義、hパラメータによる等価回路

第15週 トランジスタの等価回路について、hパラメータ

第16週 演習

後期

第1週 トランジスタのバイアス回路

第2週 トランジスタによる小信号増幅回路

第3週 トランジスタによる小信号増幅回路の設計

第4週 これまでに習った知識を使って実際に増幅回路を設計し実験を行う

第5週 FETによる小信号増幅回路

第6週 負帰還の原理、エミッタフォロワ

第7週 演習

第8週 後期中間試験

第9週 多段増幅回路の負帰還

第10週 差動増幅回路の概要

第11週 演算増幅器の特性と等価回路

第12週 演算増幅器の基本的な使い方

第13週 電力増幅回路の基礎、A級シングル電力増幅回路

第14週 B級プッシュプル電力増幅回路

第15週 高周波増幅の基礎、高周波増幅回路の特性

第16週 演習

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子回路（つづき）	平成20年度	近藤 一之	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>◆序論及び専門の基礎 (B)＜専門＞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 電子回路を学ぶために必要な基礎知識（電圧源と電流源、インピーダンスとアドミタンスの考え方、テブナンとノートンの定理、ミルマンの定理）について理解している。</li> <li>2. 半導体に関する知識（真性半導体、不純物半導体、正孔と自由電子、アクセプタとドナーなど）について理解している。</li> <li>3. ダイオード、トランジスタ、接合形FET、MOSFETの構造と働きを説明できる</li> </ol> <p>◆増幅回路 (B)＜専門＞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. トランジスタを用いる増幅回路の図式解法について、理解し、実際に解くことができる。</li> <li>5. トランジスタ増幅回路のエミッタ接地、ベース接地、コレクタ接地の各特性の特徴、差異について理解し、説明できる。</li> <li>6. 増幅度と利得の計算ができる</li> <li>7. <math>h</math>パラメータを用いたトランジスタの等価回路について理解している。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>8. 増幅回路のバイアスについて説明できる。</li> <li>9. トランジスタによる小信号増幅回路について理解し、設計することができる</li> <li>10. FETによる小信号増幅回路（共集回路）について説明でき、また、そのバイアス回路について説明できる。</li> <li>11. 負帰還の理論を理解し、負帰還をかけることの得失について理解している</li> <li>12. 差動増幅回路と演算増幅器について理解し、演算増幅器の基本的な使い方を理解している。</li> <li>13. 電力増幅回路の働きを理解し、電力効率を計算できる。</li> <li>14. 高周波増幅回路について理解している。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電子回路の解析に必要な電気回路の知識に習熟し、半導体の概要、ダイオード、トランジスタ、FETの動作を理解し、これらの素子を等価回路で表すことができ、増幅回路の動作の解析に応用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>電子回路に関する「知識・能力」1～14の確認を小テスト、中間試験、期末試験で行う。1～14の重みは概ね均等とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 演習問題をプリントとして配付するので各自復習で解くこと。数多くの問題に取り組むことが、実力をつけるための一番の近道である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>電気回路で学習する回路解析法について、充分習熟しておくこと。</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>理解を深めるため、随時、演習課題を与えることがある。</p>	
<p>教科書：「電子回路」 藤井 信生監修（実教出版）</p> <p>参考書：「基礎電気・電子工学シリーズ3 電子回路」桜庭・大塚・熊耳共著（森北出版）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間・前期末・後期中間・学年末の4回の試験の平均点で評価する。ただし、学年末試験を除く3回の試験のそれぞれについて60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には60点を上限としてそれぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。学年末試験においては再試験を行わない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子物性基礎	平成20年度	柴垣寛治	3	通年	履修単位 2	必

[授業のねらい]

電子物性は電気電子工学の重要な基礎科目のひとつである。身の回りにある電気製品はさまざまな物質材料から構成されているが、それぞれの物質が持つ電気的性質は、物質内での電子の運動と密接に関係している。物質はすべて原子からできており、さらに原子は原子核と電子からできている。この目に見えない物質構造とその中の電子のふるまいを理解しなければ、物質の電気的性質を理解することはできない。

この授業では、特に固体材料に注目してその物質構造の基礎を学ぶ。さまざまな物質構造の違いを理解したうえで、電気的性質の基礎となる電子のふるまいの考え方・取り扱い方を紹介する。また、電気電子工学において特に重要な半導体の電気伝導の基礎を理解するとともに、半導体の接合の概念を学ぶ。

[授業の内容]

前期第1週の内容は学習・教育目標(A)<視野><技術者倫理>、<B><基礎>および JABEE 基準 1(1) (a), (b)と(c)に対応し、第2週以降の内容は学習・教育目標(B)<基礎><専門>および JABEE 基準 1(1) (c)と(d)に対応する。

前期

- 第1週 電子物性を学ぶ意義
- 第2週 水素原子模型
- 第3週 エネルギー準位構造
- 第4週 結晶構造
- 第5週 フェルミ・ディラックの統計分布
- 第6週 状態密度の考え方
- 第7週 金属の電気伝導
- 第8週 前期中間試験
- 第9週 中間試験の結果に基づく復習
- 第10週 周期的ポテンシャル内の電子
- 第11週 エネルギーバンド構造
- 第12週 バンドと電気伝導
- 第13週 バンド内の電子の運動
- 第14週 電子と正孔
- 第15週 有効質量の考え方
- 第16週 まとめと演習

後期

- 第1週 金属と半導体の違い
- 第2週 半導体の電気伝導
- 第3週 真性半導体
- 第4週 不純物半導体：n型半導体
- 第5週 不純物半導体：p型半導体
- 第6週 半導体中のキャリア分布：真性半導体の場合
- 第7週 半導体中のキャリア分布：不純物半導体の場合
- 第8週 後期中間試験
- 第9週 中間試験の結果に基づく復習
- 第10週 半導体中のキャリアの輸送
- 第11週 少数キャリアの連続の方程式
- 第12週 半導体接合の意義
- 第13週 pn接合のエネルギーバンド構造
- 第14週 熱平衡状態のpn接合のキャリア分布
- 第15週 pn接合ダイオードの整流特性
- 第16週 まとめと演習

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子物性基礎 (つづき)	平成20年度	柴垣寛治	3	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 水素原子模型をもとにしてエネルギー準位構造の概念を理解できる。</li> <li>2. 物質の結晶構造について理解できる。</li> <li>3. 電子の集団を統計的に扱うことができ、分布関数や状態密度の概念が理解できる。</li> <li>4. 金属の電気伝導の機構について理解できる。</li> <li>5. エネルギーバンド構造を理解して、物質の電気的性質の違いを説明できる。</li> <li>6. 量子状態の概念を理解できる。</li> <li>7. 半導体のエネルギーバンド構造を理解できる。</li> <li>8. バンド内の電子の運動に関連して、有効質量の考え方を理解できる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>9. 半導体における正孔の役割を理解できる。</li> <li>10. 真性半導体および不純物半導体についてその違いを理解して説明できる。</li> <li>11. 半導体におけるキャリア密度と電気伝導の関係を理解したうえで、それらに関する計算ができる。</li> <li>12. 不純物半導体における不純物の役割を理解できる。</li> <li>13. キャリヤ密度の温度依存性について理解できる。</li> <li>14. 半導体の接合についてエネルギーバンド構造から理解できる。</li> <li>15. pn接合の整流特性について理解できる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電子物性の基礎となる物質構造を微視的な視点から理解し、各種固体材料における電気伝導がどのような物理的機構によって支配されているのかを定性的・定量的に説明できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～15を網羅した問題を2回の中間試験、2回の定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とする。問題のレベルは評価結果が百点法で60点以上の場合に目標の達成となるようなレベルに設定する。</p>
<p>[注意事項] 理解するのが難しい科目である。自主的な学習を積極的に進めてほしい。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 2年生までに学んだ数学・物理の基礎知識</p>	
<p>[レポート等] 必要に応じてレポート課題を与えることがある。</p>	
<p>教科書：「よくわかる電気電子物性」 岩本光正著（オーム社）          参考書：「電子物性の基礎」 宮入圭一著（森北出版），「電気物性学」 酒井善雄/山中俊一共著（森北出版） など</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間、前期末、後期中間、学年末の4回の試験の平均点で評価する。ただし、前期中間、前期末、後期中間の3回の試験のそれぞれについて60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が再試験の対象となった試験の成績を上回った場合には、60点を上限としてそれぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子制御基礎	平成20年度	奥田 一雄	3	前期	履修単位1	必

[授業のねらい]

マイコンの高性能化と産業分野への急速な普及により、あらゆる家電製品や工業製品にマイコンが搭載されるようになりマイコン自体の仕組みをよく理解することが技術者にとって重要な事項となってきた。本授業では、現在幅広く使用されているPIC16F84を対象に制御用マイコンを理解するために必要なデータの取り扱い方やプログラム作成手法について学習する。

[授業の内容]

すべての内容は、学習・教育目標(B)＜専門＞およびJABEE基準1(1)(d)(2)a)に対応する。

◆マイコン制御の基礎

第1週 マイコン：コンピュータの基本構成と制御用マイコン

◆PICマイコンの基礎

第2週 PICとは、PICの構成：PICの特徴、種類、概要

第3週 PICの構成：命令の形式、メモリ、レジスタ

第4週 PICの構成：アドレッシング、スタック、タイマ等

第5週 命令の実行、PICのプログラム開発：命令実行の流れ、プログラム開発の流れ

◆マイコンでのデータ表現

第6週 2進数、16進数：10進数、2進数、16進数の変換

第7週 デジタル回路：基本ゲート回路と論理演算

第8週 中間試験

◆アセンブラ言語

第9週 PICのアセンブラ言語、プログラムの書き方：命令の種類、アセンブラ言語の書式

第10週 PICの命令：命令のフォーマット、転送命令

第11週 PICの命令：算術命令、論理演算命令

第12週 PICの命令：ジャンプ命令、ビット操作命令等

◆プログラミング実習

第13週 LEDの制御：LEDの点灯・点滅プログラム、スイッチ入力によるLEDの制御

第14週 各種の制御：リレーの制御、DCモータの制御、パルスモータの制御

第15週 割込み制御：割込みプログラム、電子サイコロ

第16週 まとめおよび問題演習

[この授業で習得する「知識・能力」]

◆マイコン制御の基礎

1. コンピュータの基本構成、命令を実行するまでの流れ、制御用マイコンの種類等について説明できる。

◆PICマイコンの基礎

2. PIC16F84の特徴と基本構成を理解できる。

3. プログラムメモリ、レジスタ、スタック、プログラムカウンタ、入出力ポート等の構成要素について説明できる。

◆マイコンでのデータ表現

4. 10進数、2進数、16進数の相互変換ができる。

5. 2進数の負数表現を理解し、2進数の加算、減算ができる。

6. 種々の論理演算を理解しマイコンでの使用法を説明できる。

◆アセンブラ言語

7. 機械語命令の種類を理解し命令の形式について説明できる。

8. 転送命令、算術演算命令、論理演算命令、条件分岐、無条件分岐、サブルーチン命令、制御命令等の使用法を理解できる。

◆プログラミング実習

9. アセンブラプログラムの書式を理解し、プログラム実行の流れについて説明できる。

10. データ転送、条件分離、繰り返し、数値計算、ビット操作等に関する基本処理プログラムを理解できる。

11. LED、リレー、モータ等の制御に関するアセンブラプログラムの内容を理解できる。

[この授業の達成目標]

PICマイコンの特徴や構成要素を理解し、マイコンにおけるデータ表現や簡単な機械語命令の使用法を知ることによって、簡単な制御プログラムの内容を理解している。

[達成目標の評価方法と基準]

上記の「知識・能力」1～11を網羅した問題を中間試験と期末試験で出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とし、合計点の60%以上の得点で目標の達成を確認する。

[注意事項] 授業中に理解できるように心掛けるとともに、知識確認のために常に多くの問題を解いていく姿勢が大切である。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電子制御基礎（つづき）	平成20年度	奥田 一雄	3	前期	履修単位 1	必

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 2進数による数値の表現方法，論理演算とゲート回路を理解していること。

[レポート等] 学習内容の復習と応用力の育成のため，随時，演習課題を与える。

教科書：「図解P I Cマイコン実習」堀 桂太郎著（森北出版）

参考書：「P I Cアセンブラ入門」浅川 毅著（東京電機大学出版会），「P I C活用ハンドブック」後閑 哲也著（技術評論社）

[学業成績の評価方法および評価基準]

前期中間，前期末の2回の試験の平均点で評価する。ただし，60点に達していない者には再試験を課すことがある。このとき，再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には，60点を上限として，試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。

[単位修得要件]

学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気機器	平成20年度	伊藤 保之	3	後期	履修単位1	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>電気機器は、電気産業の根幹をなすと共に、産業、交通、運輸など多くの分野で重要な役割を果たしている。ここでは回転機の基本である直流機、代表的な静止器である変圧器の動作原理、構造、諸特性等について学ぶ。電気機器は電気と磁気の相互作用を利用したものであり、電気機器を理解する上で極めて重要である電気磁気学や電気回路の知識との関連も併せて理解することを目標とする。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第16週までの内容はすべて、学習・教育目標 B&lt;専門&gt;, JABEE(d)(2)a) に相当する。</p> <p>電気機器の基礎事項</p> <p>第1週 エネルギー変換と電気機器、電磁気の基礎事項</p> <p>第2週 発電機作用と電動機作用、電気機器用材料</p> <p>直流機</p> <p>第3週 直流機の原理</p> <p>第4週 直流機の構造</p> <p>第5週 直流機の理論</p> <p>第6週 直流発電機の種類と特性</p>	<p>第7週 直流電動機の種類と特性</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 直流電動機の運転、直流機の損失、効率</p> <p>変圧器</p> <p>第10週 変圧器の原理</p> <p>第11週 変圧器の等価回路</p> <p>第12週 変圧器の等価回路</p> <p>第13週 変圧器特性</p> <p>第14週 変圧器の構造</p> <p>第15週 変圧器の結線</p> <p>第16週 各種の変圧器</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 電気機器の回転機、静止器におけるエネルギー変換、電流による磁気作用、電磁力及び電磁誘導、発電機作用、電動機作用などを説明できる。</p> <p>2. 直流発電機、電動機の原理、直流機の構造等が説明できる。</p> <p>3. 直流機における誘導起電力、トルク、直流機の等価回路、電機子反作用、整流の説明などができる。</p>	<p>4. 直流機の種類、特性等が説明できる。</p> <p>5. 直流電動機の始動、速度制御、制動、逆転および直流機の損失、効率などが説明できる。</p> <p>6. 変圧器の原理、負荷時の動作、等価回路等を説明できる。</p> <p>7. 変圧器の定格、電圧変動率、損失、効率の説明などができる。</p> <p>8. 変圧器の構造、結線等を説明できる。</p> <p>9. 単巻変圧器、三相変圧器、計器用変成器等を説明できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電気機器の回転機および静止器の基礎となる物理法則を理解し、物理的な法則に基づき直流発電機と直流電動機および変圧器の動作原理を把握し、これらの構造・特徴・特性などを理解して、電気機器の等価回路から電圧・電流の関係をベクトル図に表して特性を求め、機器の損失や効率を求めることができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～9を網羅した問題を2回の中間試験・定期試験および小テストで出題し、目標の達成度を評価する。発電機・電動機および変圧器の原理に関しては基礎となる物理的な法則も重ねて問うこともある。問題のレベルは、第二種電気主任技術者一次試験「機械」と同じである。評価結果が百点法で60点以上の場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 電気機器は電気基礎の応用である。電気磁気学・電気回路に関する知識も併せ修得しなければならない面がある。予習、復習を常に心掛けるようにする。電気機器および電気磁気学、電気回路に関する多くの書物が出版され、本校図書館にも所蔵されている。十分にそれらを活用し、自ら積極的にその理解を深めるよう努力すること。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>これまでに学習してきた電気磁気学、電気回路の基礎知識を理解していること。</p>	
<p>[レポート等] 理解を深めるため随時演習課題や問題を与えレポートの提出を求めることがある。</p>	
<p>教科書：「電気機械工学」天野寛徳、常広 譲 著（電気学会） 参考書：「電気機器工学」前田 勉、新谷邦弘 著（コロナ社）、「電気機器Ⅰ」野中作太郎著（森北出版）「基礎電磁気学」山口昌一郎著（電気学会）、「電気回路論」平山 博著（電気学会）その他、電気機器、電気磁気学、電気回路に関する参考書は本校図書館に多数ある。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>後期中間・学年末の2回の試験の平均点で評価する。ただし、後期中間試験について60点に達していない者には再試験を課し、再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には、60点を上限として試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気電子工学演習	平成20年度	北村・川口	3	前期	履修単位1	必

[授業のねらい] 正弦波交流における表示法、回路の計算、共振現象の内容について、具体的な演習問題を多く解くことによって基礎理論を理解する。基本的な問題から次第にレベルを上げていくことで、基礎学力と応用力を養う。2年次で開講される電気電子工学演習に引続いて、同時に開講される電気回路と連携して行う。

[授業の内容]  
すべての内容は、学習・教育目標 (B) <専門>に対応する。  
JABEE 基準 1(1) (d) (2)a)に対応する。

第1週 交流回路の計算・並列回路の復習1  
第2週 交流回路の計算・並列回路の復習2  
第3週 総合問題  
第4週 交流電力1  
第5週 交流電力2  
第6週 交流電力3  
第7週 6週までの総合問題  
第8週 中間試験

第9週 交流回路の複素数表示1  
第10週 交流回路の複素数表示2  
第11週 簡単な交流回路の計算1  
第12週 簡単な交流回路の計算2  
第13週 回路網の計算1  
第14週 回路網の計算2  
第15週 総合問題1  
第16週 総合問題2

[この授業で習得する「知識・能力」]  
1. 正弦波交流とそのベクトル表示法について理解し、RLC直並列回路での基本回路と共振現象、および交流電力についての問題を解析できる。

2. 交流回路の複素数表示について理解し、問題を解析できる。  
3. 交流回路の計算問題を解析できる。

[この授業の達成目標]  
正弦波交流において、ベクトル表示法・複素数表示について理解し、それらを用いて、回路計算が行える。

[達成目標の評価方法と基準]  
上記の「知識・能力」1, 2, 3について中間試験および定期試験で出題し目標の達成度を評価する。1, 2, 3に関する重みは同じである。  
合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。

[注意事項] 演習問題をプリント配布することがある。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] ベクトル、複素数、三角関数等、1・2年で学んだ数学および電気回路の基礎を復習しておくこと。

[レポート等]  
授業中に行える演習問題の数を補うために、レポートとして課題を課すことがある。また、演習問題を宿題として課し、小テストも実施する場合もある。

教科書：「トレーニングノート電気基礎」(上)(下)和泉 勲(コロナ社)

参考書：「電気基礎」(上)(下)宇都宮敏男, 高橋寛, 和泉勲(コロナ社), 「詳解 電気回路演習」(上)(下)大下眞二郎著(共立出版)

[学業成績の評価方法および評価基準] 中間試験・期末試験の2回の試験の平均点で評価する。中間試験の再試験を実施する場合は、60点を上限として評価する。レポート・小テスト・宿題を課した場合は、学業成績の20%を上限として評価に組み入れることがある。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。



授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気電子工学実験	平成20年度	伊藤・中野・奥野	3	通年	履修単位 3	必

[授業のねらい]

電気電子工学科第3学年の実験においては、第2学年に引続き、電気磁気学、電気回路、および電気電子計測などの講義内容から、特に基礎的な事項を選定し、電気電子工学における基本的な考え方に対する理解をさらに深め、その応用的な発展能力を養うことを目標に電気電子工学実験を実施する。

[授業の内容]

すべての内容は、学習・教育目標(A)＜意欲＞、(B)＜基礎＞及び＜専門＞、(C)＜発表＞に対応する。

前期

第1週 諸注意および実験説明講義(JABEE基準(a)(b))

第2週 実験説明講義(c)(d)(1)

第3週 実験説明講義(c)(d)(1)

第4週 実験説明講義(c)(d)(1)

第5週～第15週

JABEE基準(d)(2)a)b)c)d)(e)(f)(g)(h)に相当する。

次の10テーマについて、各班ローテーションにて実験を行う

1. 共振回路
2. 低抵抗の測定
3. 交流回路のベクトル軌跡
4. 接地抵抗の測定
5. 単相交流電力の測定
6. 三相電力の測定
7. C言語プログラミング演習(1)
8. 鉄損の測定
9. プリント回路基板の製作
10. リレーシーケンサーの制御実習

第16週 実験室、実験器具整備

後期

第1週 諸注意および実験説明講義(a)(b)

第2週 実験説明講義(c)(d)(1)

第3週 実験説明講義(c)(d)(1)

第4週 実験説明講義(c)(d)(1)

第5週～第15週

JABEE基準(d)(2)a)b)c)d)(e)(f)(g)(h)に相当する。

次の10テーマについて、各班ローテーションにて実験を行う。

1. 直流発電機
2. 直流電動機
3. 変圧器
4. 論理回路
5. 積算電力量計
6. 回路遮断器と過電流保護継電器
7. 非線形回路
8. 磁気材料の磁化特性
9. C言語プログラミング演習(2)
10. コンデンサーの充放電

第16週 実験室、実験器具整備

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気電子工学実験（つづき）	平成20年度	伊藤・中野・奥野	3	通年	履修単位3	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. RLC直列回路の周波数領域での特性を理解しさらに、共振の鋭さQの概念を理解できる。</li> <li>2. ダブルブリッジによる低抵抗の測定を行う手法を理解し、低抵抗の基本測定法を習得することができる。</li> <li>3. インピーダンスおよび電流のベクトル軌跡を描き、回路の位相角を算出できる。</li> <li>4. 接地抵抗計とコーラウシュブリッジを用いて、接地抵抗を測定することにより、接地抵抗の概念と成極作用の概念を理解することができる。</li> <li>5. 単相電力の測定を行い、その原理と特徴を理解できる。</li> <li>6. 三相電力計などを用いて平衡および不平衡三相負荷の電力測定法を習得できる。</li> <li>7. C言語の基本的なプログラミングを書き上げ、基本的なコマンド、メール操作等の実習を行いC言語の基礎を習得できる。</li> <li>8. エプスタイン装置（電力法）により鉄心材料の損失を測定できる。</li> <li>9. プリント基板加工機の操作法を習得し、回路基板作成技術を理解できる。</li> <li>10. シーケンサ学習ソフトを用いて、シーケンス制御の基礎、基本命令、基本回路等を学ぶ。</li> </ol>	<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>11. 直流発電機の無負荷特性試験、および負荷特性試験により、その性質が理解できる。</li> <li>12. 直流電動機の起動法の習得と特性を比較検討し、各々の速度制御法についての概念を習得できる。</li> <li>13. 単相変圧器の無負荷試験、短絡試験法の習得により、変圧器の等価回路と特性について理解できる。</li> <li>14. 基本論理回路（OR, AND, デコーダ, エンコーダなど）の動作を理解、習得できる。</li> <li>15. 誘導形積算電力量計の原理、構造、特性を理解できる。</li> <li>16. 回路遮断器と過電流保護継電器の使用法を習得し、それらの機器の特性を理解することができる。</li> <li>17. 非線形素子の電流電圧特性を測定し、素子の解析ができる。</li> <li>18. 磁化特性の概念ならびに磁気履歴現象、ヒステリシス損失を理解できる。</li> <li>19. C言語の基本的プログラミングを実行でき同時にファイル管理することができる。</li> <li>20. コンデンサーの充放電により過渡現象およびその取扱に関する考え方を習得し、合わせ微分・積分回路を理解できる。</li> </ol>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>電気電子工学に関する基礎専門用語および基本的な電磁気・電気機械・情報工学の実験手法を理解して、実験結果をまとめ、結果の検討、考察等を理論的にまとめて実験報告書で報告することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～20の習得の度合をレポートにより評価する。評価における「知識・能力」の重みは概ね均等とする。レポートのレベルは、100点法により60点以上の得点を取った場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。</p>
<p>[注意事項] 実験時には作業服、靴を着用し、指導書、筆記用具は忘れずに持参すること。欠席、遅刻はしないこと。20分経過後の入室は欠課扱いとする。回路が完成したらスイッチを入れる前に担当教官のチェックを受けること。機器等の故障、破損は直ちに担当教官に届け出ること。始末書の提出を指示された場合は当日中に提出。実験終了後は、測定器具等を最初の位置に戻し、回りを掃除すること。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 2年次までに学習した専門科目での電気回路、基礎電気電子工学、電気電子製図等について復習しておくことが望ましい。基礎数学、微分積分の知識も必要である。</p>	
<p>[レポート等] 各班の全員がレポーターとなり実験報告書を提出する。レポートは、実験終了後、2週間以内に各自が担当教員に提出し、内容の不備の場合には1週間以内に再提出する。</p>	
<p>教科書：電気工学実験指導書（プリントを綴じた小冊子を使用する）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>学業成績の評価は、レポートの内容を7割、平常の実験意欲を3割として評価する。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>全ての実験テーマのレポートを提出し、学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械工学概論	平成20年度	藤松・白木原	3	通年	履修単位 2	選

[授業のねらい]

電気電子工学科の学生においても、装置の部品の簡単な設計や製作のためには機械工学の知識は不可欠である。そこで、本教科では、機械工学（水力学、熱力学、工業力学、材料力学）における基礎知識を習得することを目的とする。

[授業の内容]

(前期：藤松)

- 第1週 エネルギーの利用と変換  
(A) <視野>, JABEE 基準 1 (1) (a)  
以降の前期分については、すべて (B) <専門>, JABEE 基準 1 (1) (d) (1) に相当している。
- 第2週 静水力学  
第3週 動水力学  
第4週 熱力学の基礎, 理想気体の状態変化  
第5週 熱機関のサイクルとエントロピー  
第6週 内燃機関の基本サイクルと理論熱効率  
第7週 中間試験範囲の演習および解答  
第8週 前期中間試験  
第9週 中間試験の解答および蒸気動力プラントの基本概念  
第10週 蒸気動力プラントの構成と蒸気の性質  
第11週 蒸気表および蒸気線図の使い方  
第12週 蒸気動力プラントの性能  
第13週 熱伝導の基礎  
第14週 熱伝達の基礎  
第15週 熱放射の基礎  
第16週 期末試験範囲の演習および解答

(後期：白木原)

以下の内容は、学習・教育目標 (B) <専門> JABEE 基準 1 (1) (d) (1) に相当する。

- 第1週 機械と設計・機械に働く力  
第2週 力の合成と分解, 力のモーメントと偶力  
第3週 力のつり合いと重心の概念  
第4週 運動 (直線運動, 円運動, 落下運動)  
第5週 運動量と力積  
第6週 仕事と動力  
第7週 摩擦と機械の効率  
第8週 後期中間試験  
第9週 中間試験の返却および解説  
第10週 荷重の種類と材料の機械的性質  
第11週 曲げを受けるはりの反力とモーメント  
第12週 曲げを受けるはりの解析法  
第13週 曲げ応力と断面係数  
第14週 はりのたわみ  
第15週 ねじりを受ける軸の強度  
第16週 柱の座屈

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械工学概論 (つづき)	平成20年度	藤松・白木原	3	通年	履修単位2	選

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>(前期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 圧力の定義が説明でき、マノメーターによる圧力の計算ができる。</li> <li>2. 連続の式およびベルヌーイの定理の定義が説明でき、それらに関する計算ができる。</li> <li>3. 熱力学の第一法則および理想気体の状態方程式の定義を把握し、それらに関する計算ができる。</li> <li>4. 理想気体の状態変化(等圧, 等容, 等温, 断熱, ポリトロップ変化)に関する説明・計算ができる。</li> <li>5. 飽和蒸気表と過熱蒸気表を使って計算ができる。</li> <li>6. h-s 線図を用いてランキンサイクル等の熱効率を計算できる。</li> <li>7. 平板および円管の熱移動(熱伝導, 熱伝達, 熱通過)に関する計算ができる。</li> <li>8. 放射伝熱に関する計算ができる。</li> </ol>	<p>(後期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 機械とはどのようなものか, また機械はどのようなしくみで動くか説明できる。</li> <li>2. 力の表し方や力の性質が理解できる。</li> <li>3. 力のモーメントと偶力の概念, および力のつり合いを理解し, 計算できる。</li> <li>4. 平面図形の重心の位置を求めることができる。</li> <li>5. 直線運動及び円運動に対して, 速度と加速度が計算できる。</li> <li>6. 運動方程式を用いて力を計算できる。</li> <li>7. 運動量と力積の計算, および仕事と動力の計算ができる。</li> <li>8. 運動エネルギーおよび位置エネルギーを計算できる。</li> <li>9. 機械に働く摩擦や機械の効率を理解する。</li> <li>10. 種々の負荷様式について理解し, 応力ひずみ曲線をととして材料の機械的性質を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> <li>11. はりのせん断力, 曲げモーメントが計算できる。</li> <li>12. はりのせん断力図, 曲げモーメント図が描ける。</li> <li>13. はりの曲げ応力, たわみが計算できる。</li> <li>14. ねじりを受ける部材の強度を理解する。</li> <li>15. 柱の座屈現象を理解する。</li> </ol> </li> </ol>
<p>[この授業の達成目標] 流体の流動および熱の伝わり方等に関する基本的事項を理解し, ポンプなどの流体機器の選定に必要な専門知識, および理想気体の状態変化, 蒸気原動機, 伝熱に関する専門知識を習得することにより, 流体機器および伝熱機器の設計に応用でき, また機械に働く力とそれによって生じる運動と仕事, さらに材料の強さとその使い方を理解し, 力学に関する重要事項と材料力学に関する専門知識を習得し, 機械設計に適用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>前期は, 「知識・能力」1~8の確認を, 中間試験および期末試験で行い, 後期については, 「知識・能力」1~15の確認を, 中間試験および期末試験で行う。各項目の重みは概ね均等とする。なお, 各試験については, 合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 内容をよく理解するために, 演習問題については積極的に各自の力で解くこと。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>物理, 数学, 化学などの知識が必要である。講義では, 物理の静力学基礎と数学の微分積分(三角関数と初等関数の微分積分)を十分理解しているものとして講義を進める。</p>	
<p>[レポート等] 原則的には報告書の提出は行わない。各試験前には, 演習問題の実施と解答を行う。</p>	
<p>教科書: [前期]: 「原動機」 安藤常世ほか共著(実教出版), [後期]: 「機械設計1」 林洋次ほか共著(実教出版)  参考書: 「水力学」生井 武文・共著(森北出版), 「なっとくする材料力学」辻知章(講談社)等</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>4回の定期試験の平均点で評価する。ただし, 各試験において60点に達しない学生については, それを補うための再試験を実施することがあるが, 再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には, 60点を上限としてそれぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。なお, 学年末試験における再試験は行わない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績の評価方法によって, 60点以上の評価を受けること。</p>	